

大地に深く息づくルーツ

コネチカット州ブルックフィールドにあるマーク・ライオン国際会長の自宅を囲む全長60メートルの石垣は、ただの壁ではない。彼の人生における多くのこと同様、それはひとつの「物語」だ。

その石垣を構成する一つひとつの石は、周囲の森や野原から、ライオン自身と家族、そして友人たちが集めたもの。石はすべて手作業で、まるでパズルのピースをはめ込むように、何カ月もの時間をかけて丁寧に積み上げられた。「一つひとつ、着実に。長く残るものは、そうやって築いていくんです」。そう彼は微笑む。

忍耐、粘り強さ、そして思いやりの静かな証しとして、そこに佇む石垣。いつまでも残り、影響を与え続けるものとは、多くの人の手による思いやりの行動の積み重ねによって生まれる—そんなことを思い出させてくれる存在だ。石垣は、コネチカットで受け継がれてきた長い建築の歴史だけでなく、ライオン会長が伝統を重んじる姿勢も反映している。ルーツには大きな意味があるからだ。

ライオンは、夫であり、父であり、ミュージシャンであり、会社の重役であり、リーダーであり、そして長年のライオンズ会員だ。しかし色んな意味で、「普通の人」でもある。「キッチンに立ったり、焚き火を囲んだり、ライオンズの例会に出たり。人というのが好きなんです」と彼は言う。「ジーンズにTシャツが定番。見たままのわかりやすい人間です」

彼の心の拠りどころはブルックフィールドにある。彼の人生の物語が形づくられてきた場所だ。牧師であったマークの父は、各地を転々とした末、町の教会を再生させるという使命のもと、家族の定住の地としてブルックフィールドを選んだ。

こうしてブルックフィールドにやってきたマーク少年は、ここに根を下ろすことになる。小さな町ならではの温かさと豊かな自然は、腰を据えるのに理想的な環境だった。また、互いに助け合うコミュニティ精神が肌に合った。「コミュニティと奉仕は、自分にとっては呼吸する空気のようなものでした」とライオンは振り返る。

やがて彼は家庭を築き、ブルックフィールドにおけるルーツはさらに深まる。幼い頃からの友達だったリンと結婚し、二人は互いを支え合う最高のサポーターとなった。そして中国から3人の娘を養子として迎えると、夫婦は新たな「コミュニティ」を自ら発足した。娘たちが同じ文化的背景を持つ子どもたちとつながれるよう、養子縁組家庭のための支援グループを立ち上げたのだ。

「自分たちのルーツはここブルックフィールドにあります。心はグローバルです」

家族と地域社会にこれほど深く根を下ろしながら、ライオンの人生は、なおも枝葉を広げていった。

「——」
コミュニティと
奉仕は、
自分にとっては
呼吸する空気の
ようなものでした。
「——」

